

苫小牧港長期ビジョン

— 東アジアの発展とともに北海道を牽引する苫小牧港 —

苫小牧港管理組合により監修された資料を元にホームページ用に編集を行い掲載しています

平成 16 年 5 月

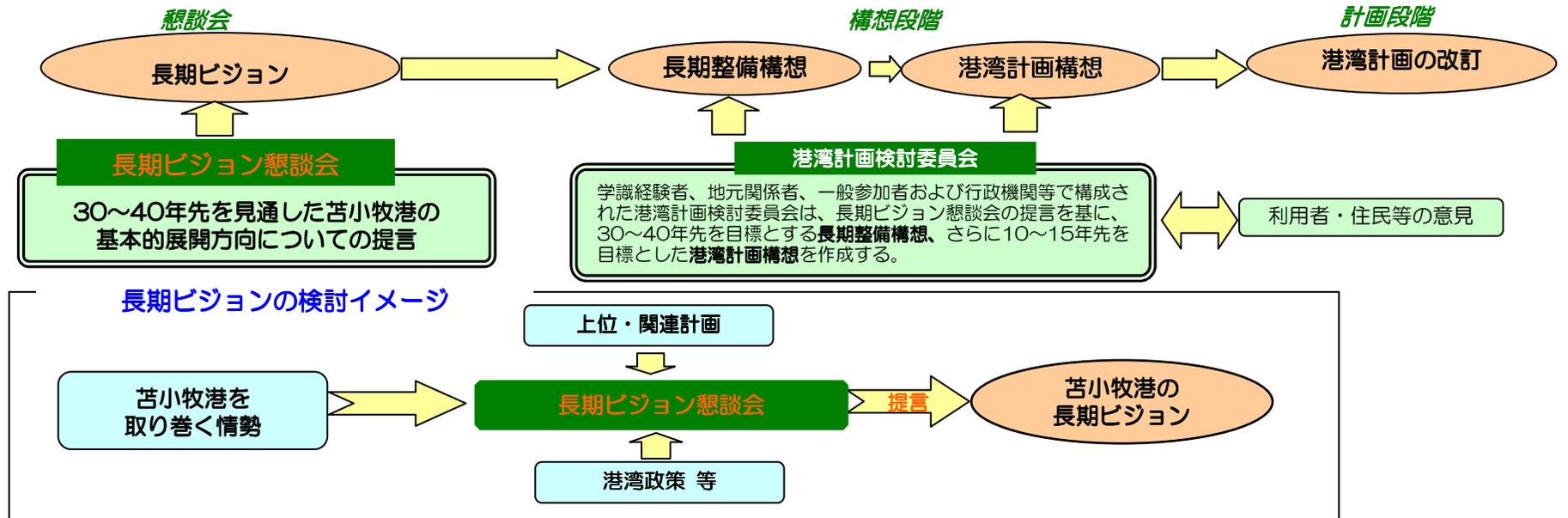
長期ビジョン懇談会の趣旨

国内外の経済社会情勢や輸送の高速化・ユニット化など物流環境の大きな変革、そしてモーダルシフトに代表される地球的規模の環境対策など港湾を取り巻く情勢が大きく変化してきている。
 このような状況にあって、苫小牧港長期ビジョン懇談会は、むこう30年から40年先を見通した苫小牧港の基本的な展開方向について、学識者・有識者の専門的な立場から、提言を仰ぐことを目的とするものである。

<背景>

苫小牧港は、現在、概ね平成17年を目標年次とした港湾計画に基づいて、整備が行われている。
 海外に向けては、外貿コンテナターミナルや多目的国際ターミナルなどの整備を進めるなど、わが国の北の中核国際港湾として重要な役割を担ってきており、今後、北米や中国など北東アジア地域における経済情勢に対応した新しい国際的な物流拠点港湾として、安全で効率的な機能強化が求められている。
 また、国内においても、フェリー、RORO貨物などの流通拠点港湾として重要な地位にあることから、国内定期航路の機能を拡充し、東・西両港区が安心して効率よく利用できる物流産業空間としての整備が求められている。
 さらには、近年、市民のみならずやうみへの関心が高くなりはじめていることから、まちづくりと連携した市民に開かれた港湾空間の整備が望まれている。
 このようなことから本港は、国内外の経済社会情勢の大きな変化や、今後想定される地域経済社会の動向などをふまえ、たくましく成長して未来を生き抜いてゆく次世代の港湾を目指していくものである。

苫小牧港港湾計画策定フロー



1. 経済・社会情勢等の予測シナリオ

経済の動向

- ・構造改革が進み、国内経済成長率が上昇し、国内実質経済成長率が1~2%程度と予測されている（政府目標）
- ・中国を中心とするアジアに巨大な経済圏が形成される
- ・グローバル化が一層進み、経済統合、市場統合が進展し産業が形成される

農業の動向

- ・人口減による国内需要が減少する
- ・品質の良い農作物は中国等での農産品需要の増加等によりマーケットが拡大する
- ・寒冷地の特性を利用した国内食糧基地としての重要性が増大する

製造業の動向

- ・主要生産工場の海外展開が進む
- ・老朽化施設を中心に集約・再編が進む
- ・立地企業の省資源化や道内消費に対するリサイクル産業が進展する
- ・リサイクル産業がわが国のリーディング産業として展開する
- ・化学コンビナートの国内再編、既存産業の技術力の活用や生産技術が高度化する
- ・機械、組立産業が進展する
- ・国産中・小型ジェット旅客機の開発による国内における関連施設が立地する

エネルギーの動向

- ・低成長と省エネ技術の進展によりエネルギー需要はほぼ横這い
- ・エネルギーの多様化により石油依存度が低下し、天然ガスや自然エネルギー、サーマルリサイクルなどによるエネルギー供給が増加する
- ・サハリン開発に伴う石油・天然ガスによる生産拠点の可能性が高まる

各国の人口推計（2050年）

- ・世界全体…89億人(39%増)
- ・中国…14.7億人(11%増) 韓国…5,100万人(5%増)

北海道の人口

- ・出生率低下や道外への人口流出→2020年で522万人
- ・2030年には500万人を割る見込み
- ・農業、観光など魅力ある施策展開で社会増も考えられる
- ・札幌一極集中が顕著となり、背後圏人口は微増が横這い
- ・住みやすい北海道→海外からの居住者や“第2のふるさと”を求めて移住者増加の可能性が高まる

人口

経済・社会情勢等の予測シナリオ

経済・産業

物流

交流

安全・安心

交流・観光の視点

- ・新千歳空港との連携による交流拠点化が進む
- ・国際交流、人づくりに対応した機能整備が進む
- ・クルーズは市民に対する港湾計画の目玉・道全体の観光ネットワーク化による観光拠点になる
- ・アジアからの観光客が増加する

自然災害等の対応

- ・樽前山噴火により、周辺地域の被災が予測される
- ・大規模地震予測による、自然災害に対する危機管理システムの構築の進展が考えられる

外国貿易の動向

- ・本道における経済の低成長や人口の動向から、貨物需要は現状程度で推移する
- ・東アジア-北米航路の中継拠点として、戦略的に貨物が集約される
- ・生産の拠点がアジアへシフトし、外貿貨物は増加する可能性がある
- ・人口増加地域への食糧供給のため、新たな輸出貨物の可能性が高まる
- ・長期的にはカボタージュなどの規制緩和により、国際輸送は3~5倍のオーダーで増加する
- ・国際輸送はアジアの物流ネットワークを中心に、コンテナ船、フェリー、RORO船の時代が来る
- ・外貿コンテナ貨物は、アジア圏内で1500TEUクラスの船で大量に動く。北米航路の輸送需要は増加傾向で推移する
- ・本道は東アジアと北米を結ぶ航路上に位置し、国際物流拠点としての進展が考えられる
- ・国際航空輸送が増加するとともに、インターモダルな物流需要の増加が予想される
- ・物流の安全性の確保が今まで以上に求められる

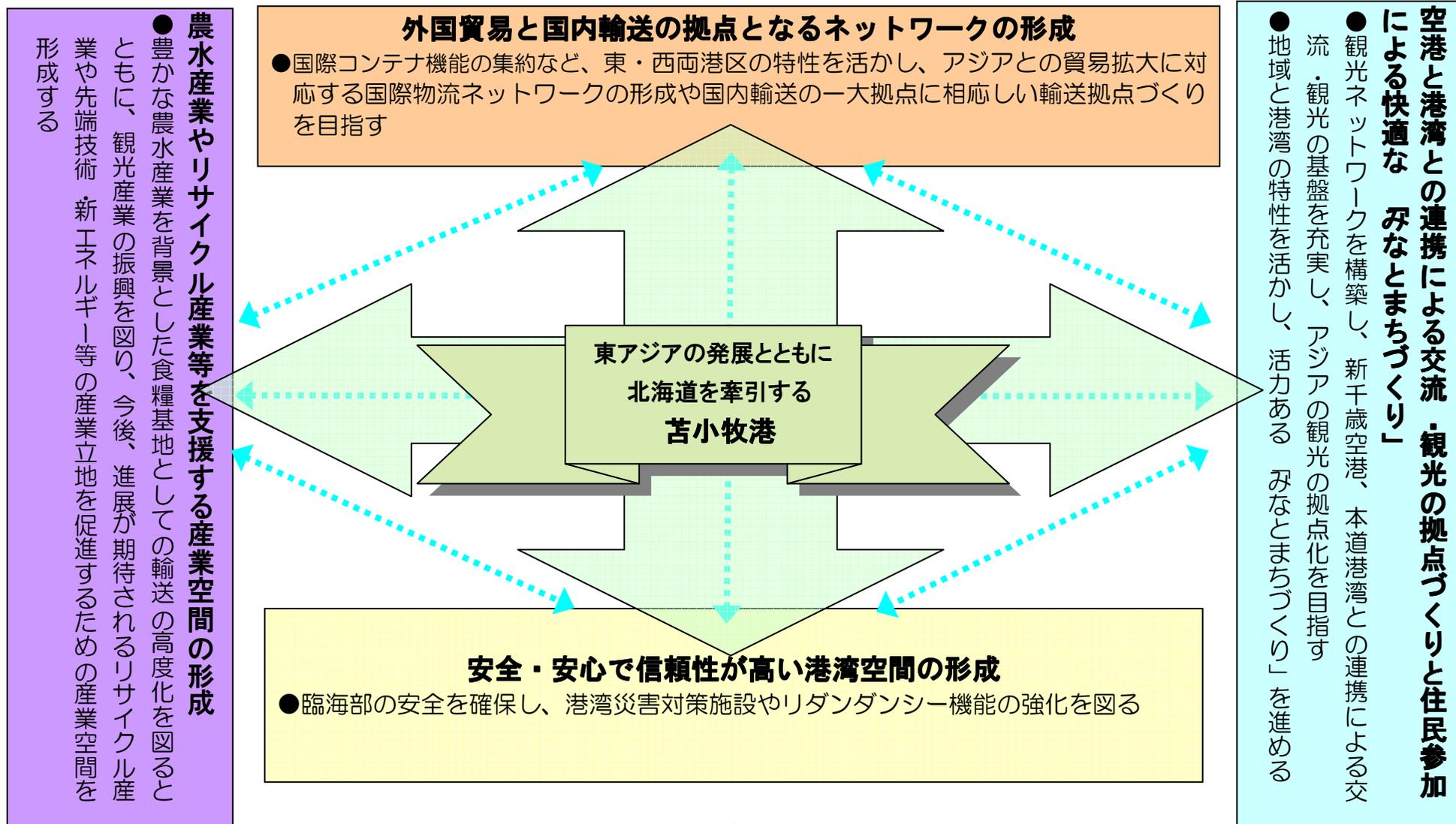
国内輸送の動向

- ・海上輸送の合理化により、輸送サービスの競争が進展すると考えられる
- ・内貿定期航路の再編が進展し、苫小牧港への航路一極集中が進むと考えられる
- ・陸海空の交通拠点が集中しており、さらに利便性の高い内貿物流拠点が形成される
- ・北海道農業を基盤とした食糧基地の形成により定期船輸送が活発化する

注) 将来において考えられることを記述したのでそれぞれが矛盾することもある。

2. 将来目標と基本方向

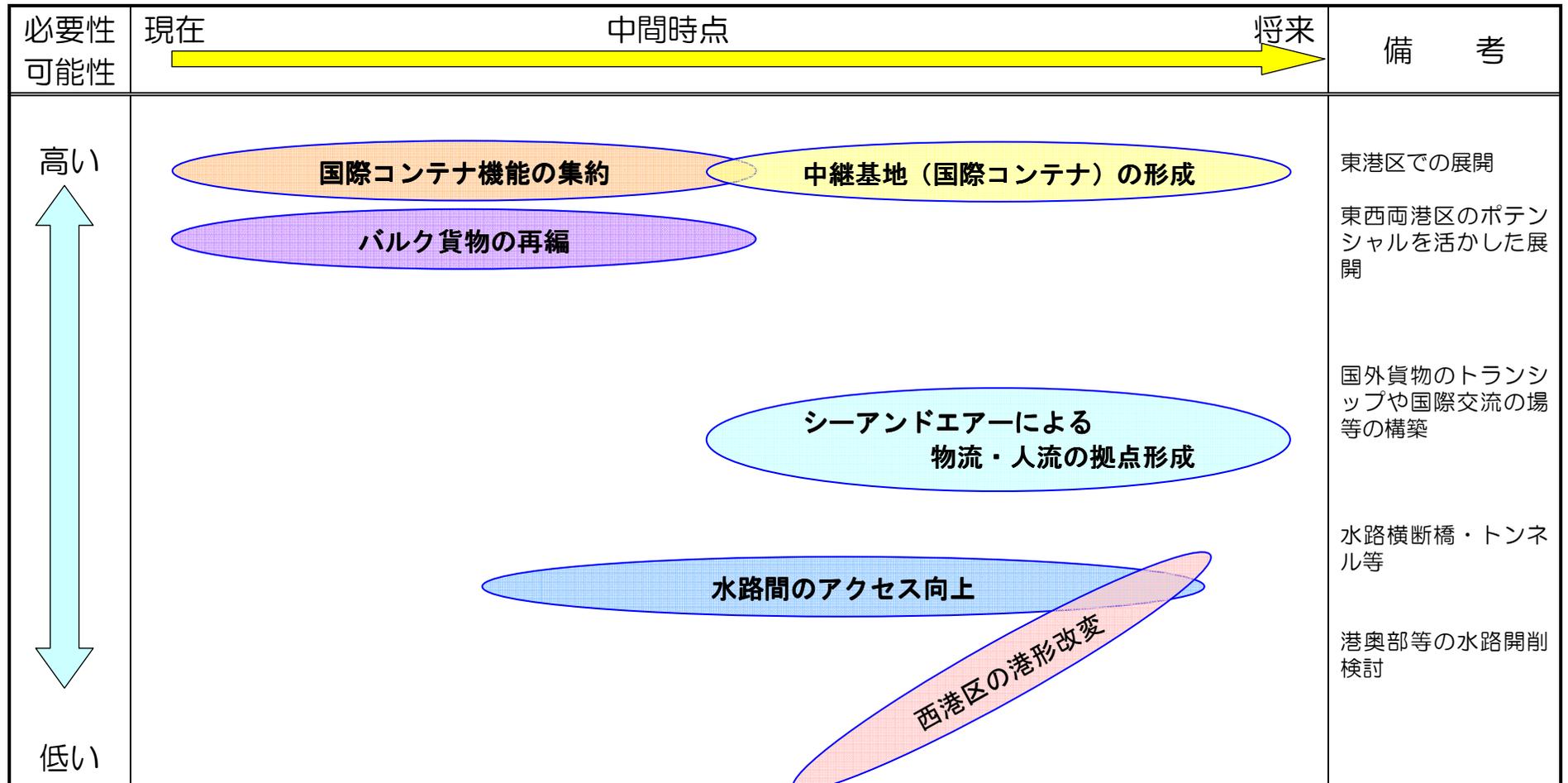
苫小牧港の長期ビジョンとして、急速に発展するアジアの経済社会を展望し、地域統合や市場統合を視野に入れて、北海道の発展の牽引力となる将来目標と基本方向を次のとおり設定する。



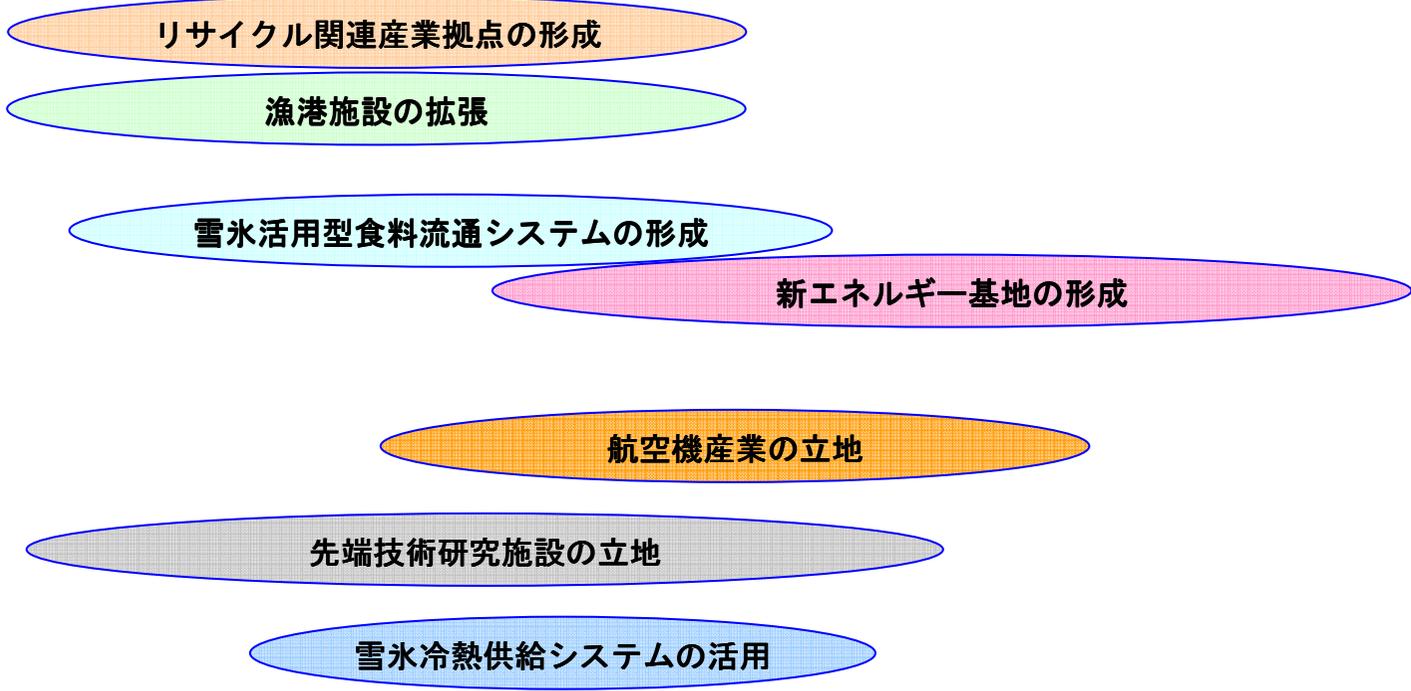
3. 将来のプロジェクトの可能性について

苫小牧港における長期的な整備の方向性として、物流、産業、交流、安全・安心の4つの視点に対して主要プロジェクト、主要施策の必要性並びに可能性を示す。

I. 物流空間について



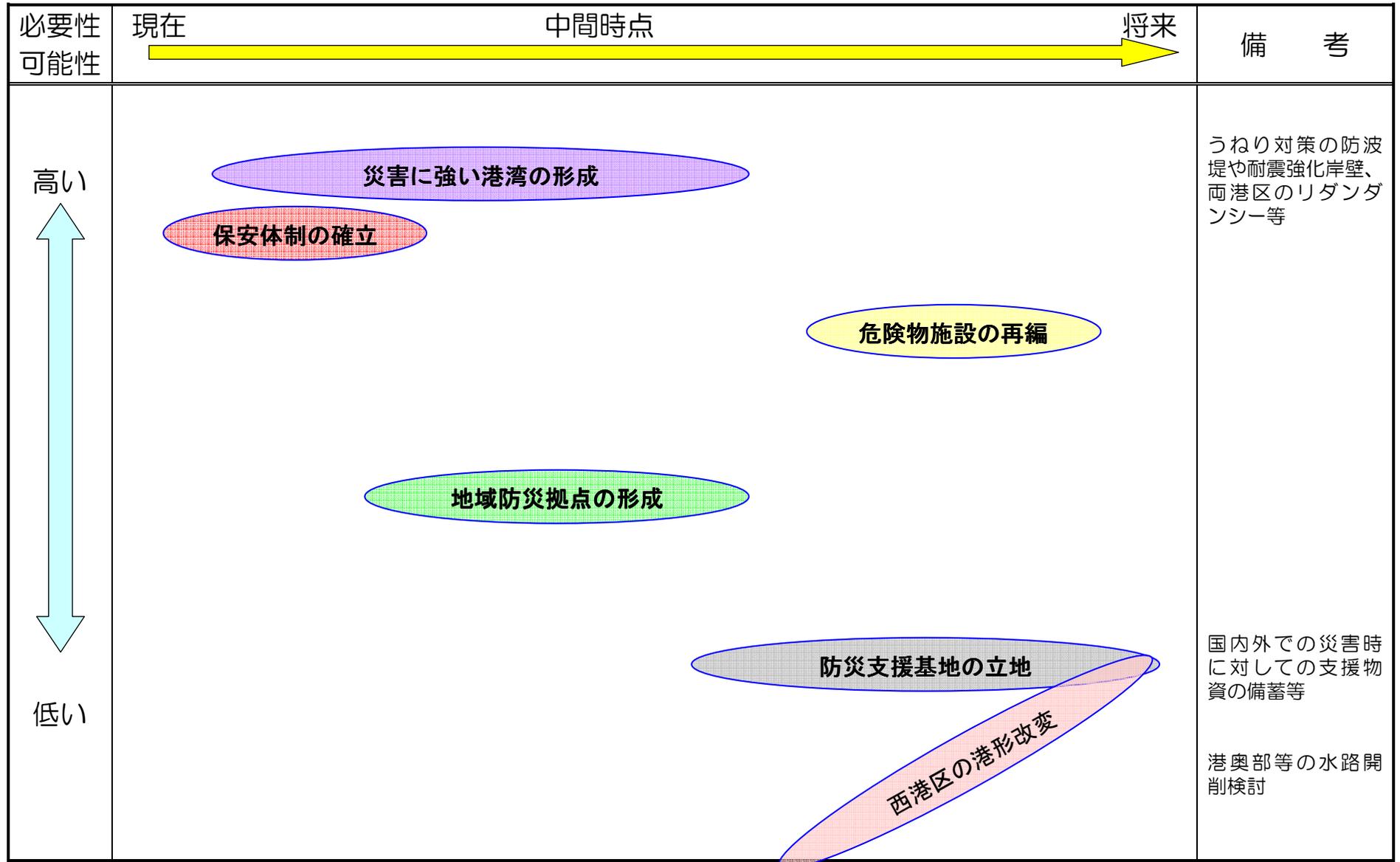
Ⅱ. 産業空間について

必要性 可能性	現在 → 中間時点 → 将来	備 考
<p>高い</p>   <p>低い</p>		<p>東港区の重点化</p> <p>農産物物流の安定供給と効率化</p> <p>水素エネルギー等の新エネルギー基地化</p> <p>国産中・小型ジェット旅客機の開発・製造</p> <p>ナノテクやバイオマス等</p> <p>首都圏のヒートアイランド対策</p>

Ⅲ. 交流空間について

必要性 可能性	現在	中間時点	将来	備 考
高い 低い	シンボルゾーンの形成		マリーナの機能充実	
	水産資源を活用した 観光拠点の形成			
	苦東地域における シンボリックな公園の造成			北ふ頭を含む本港地区のウォーターフロント道内マリーナとのネットワーク化 漁港周辺でのレストラン・朝市・イベント広場等
	クルーズ・観光施設の整備 による観光拠点の形成			国営公園や道立公園等 東港区での展開

IV. 安全・安心について



苫小牧港管理組合により監修された資料を元にホームページ用に編集を行い掲載しています

苫小牧港長期ビジョン

東アジアの発展とともに北海道を牽引する苫小牧港

□ 苫小牧港長期ビジョン作成の趣旨

苫小牧港は、外貿コンテナターミナルや多目的国際ターミナルが整備され、わが国の北の中核国際港湾として重要な役割を担ってきた。今後、中国をはじめとする東アジア地域の国際物流拠点、また、東アジアと北米などを結ぶ拠点として、経済情勢に対応した国際的な物流拠点港の役割の強化が求められる。国内輸送等においても、フェリーやRORO貨物などの北海道の拠点港湾として、国内定期航路の拡充や、東・西両港区の安定した物流産業空間形成のための整備が求められている。また、近年、市民の港や海への関心の高まりとともに、まちづくりと連携して市民に開かれた港湾の空間としての整備が望まれている。

さらに、安全、セキュリティ、環境などにおいて、質を高めることが重要となっており、既存の港湾を高質港湾に再生することが必要となってきた。

このようなことから、苫小牧港において、今後想定される国内外の経済・社会情勢の大きな変化や、地域の動向などを踏まえ、逞しく成長を続け未来を切り開く、次世代の港湾を目指す長期的展望に立った指針を作成することとした。

平成15年度に、社会・経済、港湾、都市計画、環境など、学識者・有識者9名から成る懇談会を設立し、各専門分野の視点における、30年から40年先を見通した苫小牧港の基本的な展開方向について提言を頂き、長期ビジョンとしてまとめた。

○ 懇談会

第1回懇談会

日時 平成15年12月3日(水)15:15～17:30

場所 グランドホテルニュー王子

議題 ①苫小牧港を取り巻く情勢

②その他

第2回懇談会

日時 平成16年2月25日(水)14:00～16:30

場所 グランドホテルニュー王子

議題 ①経済・社会情勢等の予測シナリオ

②長期ビジョンの視点

③将来プロジェクトの可能性

④主要プロジェクトの展開イメージ

懇談会名簿

五十音順 敬称

氏名	所属	職名	摘要
赤司 淳也	国土交通省港湾局計画課	港湾評価審査官	
稲村 肇	東北大学大学院情報科学研究科	教授	
栢原 英郎	社団法人 日本港湾協会	理事長	座長
小林 三樹	藤女子大学人間生活学部人間生活学科	教授	
田中 敦幸	北海道港湾協会	参与	
田村 亨	室蘭工業大学工学部建設システム工学科	教授	
成瀬 進	苫小牧港管理組合	専任副管理者	
船津 秀樹	小樽商科大学商学部経済学科	教授	
宮地 陽輔	北海道開発局港湾空港部港湾計画課	課長	

□ 長期ビジョンの構成

○ 長期ビジョン懇談会の趣旨

1. 経済・社会情勢等の予測シナリオ
2. 将来目標と基本方向
3. 将来のプロジェクトの可能性について
 - I 物流空間について
 - II 産業空間について
 - III 交流空間について
 - IV 安全・安心について

□ 長期ビジョンの概要

1. 経済・社会情勢等の予測シナリオ

苫小牧港における30年から40年先を見通した基本的な展開方向について、学識者・有識者それぞれの専門的分野から提言を頂くため、前提条件となる、経済・産業や人口、交流、安全・安心、物流など、将来の本港を取り巻く諸情勢を予測したシナリオ。

《特筆すべき事柄》

(1) 国際社会の動向

① 急激に人口が増加する東アジア

世界人口が30～40年先には89億人へと増加が見込まれる。特に、世界人口の4分の1を占める東アジアでは22億人まで達し、さらに、目覚ましい経済発展が期待され、巨大な経済圏が形成されると予測される。

② アジア経済圏の動きとその対応

中国を始めとする東アジア経済は、米国依存型から、東アジア域内での相互発展を軸とした経済へと変わりつつあり、米国経済成長の高低に関わらず高い成長を実現すると見られている。また、現在、東アジア地域では、FTAやEPAなど、地域貿易協定が進められており、特に高成長を続ける中国では、国対国の経済政策から、地域ブロック経済に政策転換している。北海道においても、農林水産、工業、観光等得意分野ごとに、中国など東アジアの地域とそれぞれの地域が、直接、結びつくことによって発展していくように、交流機能を強化していく必要がある。

(2) 北海道の動向と苫小牧港

① 人口の動態

出生率低下や道外への人口流出などから、30～40年先には500万人を割る予測もあるが、農林水産業や観光など魅力ある施策の展開しだいでは社会増も考えられ、また、交流人口の増大が期待される。

② 北海道の将来動向

豊かな資源や風土、広大な面積を有する北海道の特性を生かして、国際化や情報化・技術革新、高齢

化等に対応しながら、日本の国際交流の北の拠点、食料の供給基地、バイオ産業等、新たな産業の展開の場、世界的なリゾートの形成や、北国らしい伸びやかな人間生活の場としての発展を図り、我が国や世界の発展に貢献していくとしている。

③ 東アジア、特に中国への進出

今後、東アジアと北海道は、物流や産業の交流をとおして、地域間相互の交流を活発化することにより、地域発展の施策を講じていく。

④ 苫小牧港に求められる対応

苫小牧港においては、新たな産業の導入の場として機能することが求められており、さらには、道内産業の国際化に向けた競争力のある産業構造への転換が急がれていることから、世界の国や地域との経済交流や技術交流を進めるための国際的なヒトやモノ、情報などの北の交流拠点として、機能していくことが求められている。

2. 将来目標と基本方向

苫小牧港の長期ビジョンとして、北海道の発展の牽引力となる将来目標と基本方向を次のとおり設定する。

○ 将来目標

「東アジアの発展とともに北海道を牽引する苫小牧港」

今後、急速に発展するアジアの経済社会を展望し、巨大な経済圏として形成される地域統合や市場統合を視野に入れて、東アジアの発展とともに北海道の発展を牽引する拠点港として機能を強化していく。

○ 基本方向

(1) 港湾空間における新たな展開と海上輸送における基本的方向

「外国貿易と国内輸送の拠点となるネットワークの形成」

国際コンテナ機能の集約など、東・西両港区の特性を活かし、アジアと日本(北海道)の貿易拡大、及び東アジアと北米との輸送ネットワーク形成に対応する国際拠点として、また、国内輸送の一大拠点に相応しい輸送拠点づくりを目指す。

(2) 産業基盤の形成に対する基本的方向

「農水産業やリサイクル産業等を支援する産業空間の形成」

豊かな農水産業を背景とした食糧基地の輸送機能の高度化を図るとともに、観光産業の振興のための交流機能を有する多機能産業空間を創造する。また、今後、進展が予想されるリサイクル産業や先端技術・新エネルギー等の産業立地を促進するための産業空間を形成する。

(3) 交流基盤の形成に対する基本的方向

「空港・港湾との連携による交流・観光の拠点づくり」と

「住民参加による快適な『みなとまちづくり』」

観光ネットワークを構築し、新千歳空港、本道港湾との連携による交流・観光の基盤を充実し、アジアの観光の拠点化を目指す。

地域と港湾の特性を活かし、活力ある「みなとまちづくり」を進める。

(4) 安全・安心な港湾空間の形成に対する基本的方向

「安全・安心で信頼性が高い港湾の形成」

臨海部の安全を確保し、港湾災害対策施設やリダンダンシー機能の強化を図る。

3. 将来のプロジェクトの可能性について

苫小牧港における長期的な整備の方向性として、物流空間、産業空間、交流空間、安全・安心の4つの視点に対応する、主要なプロジェクト、主要施策の必要性、実現可能性、また、考えられる時期を示した。

主要プロジェクトの展開イメージは、縦軸に必要性や可能性の高低、横軸は時間軸としたグラフにより表現した。

□ 今後の進め方

この長期ビジョンを基に、平成16年度から、学識経験者、地元港湾関係者、一般参加者および行政機関等で構成される港湾計画検討委員会を設立し、30～40年先を目標とする長期整備構想等を作成することとしている。

さらに、港湾計画改訂に向けた作業を進めていく。